

Essay

In My Life

通じる日本語、使おうよ

～コミュニケーション・ギャップと日本語～

シンキング・バーズ

日本語研究班

意味不明ことばと ことばの暴力

●十分すぎるギャップを生む環境

コミュニケーション・ギャップと
コいうことばが使われるようになってから、ずいぶん時が経ちます。翻訳的に書くと、「意思疎通の溝」。ワタシたち日本人が、いろいろな場面で遭遇する「溝」です。

ワタシたちは一応、日本語研究に取り組むにあたって、社会言語学という研究領域の書物を、いくつか読ませて頂きました。刺激されることが多く、かなり役に立っています。

社会言語学の研究分野として知られてるのが、「地域のことば (dialect)」「性別ことば (gender speech)」「階層ことば (classes speech)」「年齢ことば (generation speech)」です。古語とは言えない「歴史のことば」(みなさんは「死語」なんて言ったりする)も含まれるかもしれません。

ワタシたちが普段使う言語は、地域や性別、生活環境や年齢、時代などで、マチマチです。最近、グローバル化とかありますから、異言語接触も言語生活に大きな影響を与える要素になっています。ワタシ的には、日々変転という感じでしょうか。

日本語の場合、言語環境がかなり深刻にゴチャまぜ状態になっていて、「ギャップ(溝)」が生まれる要素は、至る所に溢れて

いるとワタシたちは考えています。会話が成り立たない、つまり、日本人同士なのに、「何言ってるのか全然わかんない」状態に、いつどこで陥っても不思議ではない環境は、十分に整っていると思います。



●言語スイッチの切り替え

言ってることがわかんないんだから、文字通り「お話になりません」。理解できて「お話にならない」なら、まだ救いはあるけど、日本語を日本語に翻訳しないと会話にならない状態って、どうしたら良いんでしょうねえ。

社会言語学の研究では、一つの言語の中で、状況や話し相手、話題などで使うことばを変える現象があるとしています。職業ことば(いわゆる業界用語)などの特定集団のことばを「レジスター (register)」、話し相手が目上か同僚か年下かななどで変えることばを「スタイル (style)」と呼ぶそうです。その典型的な事例が、「丁寧ことば (politeness)」ですね。

異なる言語間で言語スイッチの切り替えができる人のことを、バイリンガルとかマルチリンガルと言います。でも、一つの言語の中で切り替えができる人は、今のところ名前はない。「ため口」叩く人は、「言語スイッチの切り替えができない人」の烙印押されるんでしょうね。

●いろいろなギャップを生む要素

コ ミュニケーション・ギャップを解消するために、言語スイッチを切り替える方法は、確かに有効です。でも、それですべての課題解決になるかは、かなり疑問です。学校では、日本語の言語スイッチ切り替えなんて教えませんし、表面いい人、裏で極悪って、最低ですよ。それが小学生だったりしたら、ゾッとするでしょ？

先の分類に従うと、ギャップの要素には以下のものがあります。

1. 地域間ギャップ
2. ジェンダー・ギャップ
3. 階層ギャップ
4. ジェネレーション・ギャップ

地域間ギャップは、いわゆる「共通語」の普及で、かなり解消しています。高齢層を除くと、「地域のことば=母語」の話者は、減少の一途をたどっていると言えるでしょう。その反動で、失われつつある「地域のことば」が脚光を浴びるのかもしれませんが。

ジェンダー・ギャップは、日本語特有の歴史的構造に根ざす要素が、かなりあります。ワタシたちが「和語」と呼んでいるネイティブな日本語は、女性的要素が強く、ひらがなと結びついて、日本語の根幹をなしているという特殊性があるからです。そのため、漢語に男性性を移植しようとした言語意識とは、根の部分からギャップがあるのです。そこを突き詰めて行くと、論文を書くしかなくなるので、ここでは、言語として男性性を担保する方向性が、漢語から「粗暴なことば」に移行したとだけ指摘しておきます。結果として、ことばによるDVが現れます。日本語の男性性は、「粗暴なことば」ではなく、「紳士的 (gently) なことば」によって担保されるべきというのが、ワタシたちの見解です。

階層ギャップは、日本語の場合は、職業層ギャップと考えた方が妥当なのでしょう。ここには、組織内の上下関係や、いわゆる「いじめ」を誘発するような力関係で使われがちな日本語が挙げられます。また、専門用語など、特定の人にしか理解されない用語も挙げられます。後者は、コミュニケーション・ギャップにはちがいませんが、ある意味では仕方がないことです。問題となるのは、やはり前者に該当する日本語です。

ジェネレーション・ギャップは、どんな時代でもある程度は起こることです。でも、現代日本語の場合は、言語環境がめまぐるしく変化し、いわゆる「若者ことば」の増殖や変化のスピードも、昔とは比較にならないほど早いのです。一定の年齢層以上の人は、当然その変化にはついて行けないし、ついて行くことに意味を感じなくなります。

●ワタシたちの試行錯誤

実 際のコミュニケーション・ギャップは、これらの要素が複雑に絡み合って起こります。言語以前の問題として、考え方のちがいなどの要因があるとはいえ、現象としての日本語による意思疎通には、課題がいったいなことは確かです。

ワタシたちは、日本の義務教育を受けた人なら、誰でも読める日本語を心掛けて日本語を書いています。その心は、以下のとおりです。

1. 訳わかんない日本語の克服
2. 日本語による暴力の根絶

その課題解決のための試行錯誤は、これからも続きます。

(2018年8月2日)

※参考にさせて頂いた資料)

岩田祐子、重光由加、村田泰美著『概説 社会言語学』(2013年、ひつじ書房)

シンキング・バース新書

ボクとワタシの日本語診断
通じる日本語、使おうよ

2018年8月2日（初版）発行

著者：シンキング・バース
日本語研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：**シンキング・バース**

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バースに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。